

『ナマケモノの妖精』作者 尾生 礼人

昔、神様が生きものを作った時のことです。

はじめは、天使達にお世話させていましたが、

沢山 作りすぎたせいで、人手が足りなくなっ

てしまいました。困った神様は、妖精さんに

お手伝いしてもらおうとしました。

ところで、妖精さんは自分の体をもちません。

おなかはずきませんが、おいしいものを食べることも出来ないのです。

神様は妖精達を集めると、言いました。

「生きもののお世話をすめなら、その体に宿るじよを評すじよ。」

妖精達は大喜び。なぜって生きもの体に宿れば、

『気持ちいい』や『美味しい』を感じられるからです。

妖精たちは、さっそくお世話を始めました。

お花さんに宿るなら、お日さまがよく当たるように

お顔のむきをチョロドロかえてあげます。

そうすると、お花さんはひなたぼっこ出来て、妖精さんも

ポカポカあたたかいです。

リスさんに宿るなら、ドングリが落ちてくるように

コソコソお顔をむけてあげます。そうすると、リスさんは

ドングリを見つけて食べられるので、妖精さんも

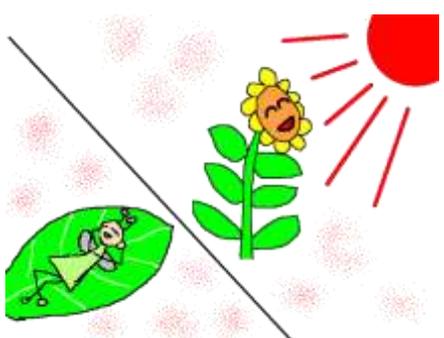
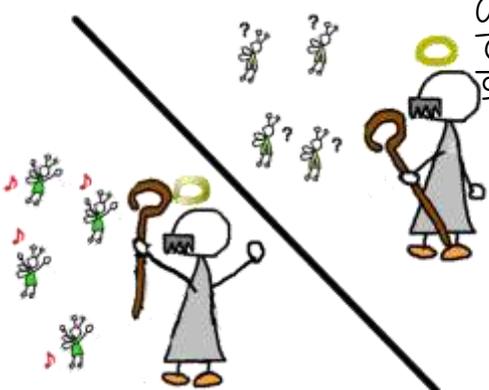
モグモグおいしいのです。

(みなさんも何かを発見することがあったら、それは

妖精さんのおかげかもしれないですよ?)

みなさん、もうおわかりですか?..

妖精さんは、生きもののお心と体を100%、操ることが出来るのです。



でも、それをしていいのは『お世話に必要なとき』だけ…。  
それも、気づかれないよう、コッソリやるきまりでした。

目に見えない誰かがそんなことしてるなんて知ったら、  
おちつきませんからね。

その生きものが『イヤがることをしてはダメ』という  
決まりもありません。

でも、そこはイタズラ好きの妖精たち…。

『お世話のため…』とイイワケしては、イタズラをしていました。

イタズラというカワイク聞こえますが、妖精たちのイタズラは、おもしろ半分で命を  
つぶったり、心をキズつけたりする、ザンコクなものばかり…。

妖精のほうでもそれを心配してよく見張ってはいたのですが、たくさんの生きものをお  
世話する妖精さんは、その数もまたたくさんです。とても見張りきれぬものではありません  
せん。

そこで妖精は、妖精たちに『かんさし日記』をつけさせることにしました。

それも、ウソを書く頭がイタくなる、魔法の『かんさし日記』じゃ。

つまりイチイチ見張っていても、日記さえ読めばきちんとお世話が  
されていくか分かる、よごしわけでした。

妖精たちはジブジブイタズラをひかえるようになりましたが、

なんとかズルをしようと日記のつけかたを工夫するうち、『ぬけみち』を見つけました。



『ウンじゃないけど、ホントでもない』と『なり、書いても頭がイタクならないのです。

妖精たちはコシを利用して、自分たちのしたイタズラを、さも生きものたちがやったよう  
に見せかけました。

つまり、読む人がゴカイするような書きかたを、わざとしたのです。

とは言え、バシたら大変ですから、はじめのころはたまりにやるだけでした。

でも、くらやんでも何も言われないので、ドンドンやるようになりました。

悪いことだ、イタズラしたがる妖精さんは、一人や二人ではありません。



でも、いきなりイタズラがふえたら、神様もヘンに思いますよね？



ましてや、生きものたちは神様にとって大切な子ども…。  
子どもがフルサをしたなんて信じたがる親はいません。

そこで妖精たちは、ウソのストーリーをこしらえることになりました。

《はじめは神様の教えを守ってよい子にしていた生きものたちは、  
だんだんぐらぐらが泣くようになったわい、悪い子になってしまった。》

なぜかは分かりませんが、一見もっともらしく聞かせますよね。

『どんなウソでも、たくさんの人が言うことホントに聞かせる。』

と言いますが、神様は、あるじじいとかそのウソを信じてしまいました。

まさしく、『木を隠すには森の中』…。

生きものみんなを悪い子に仕立てた妖精たちは、やりたい放題でした。

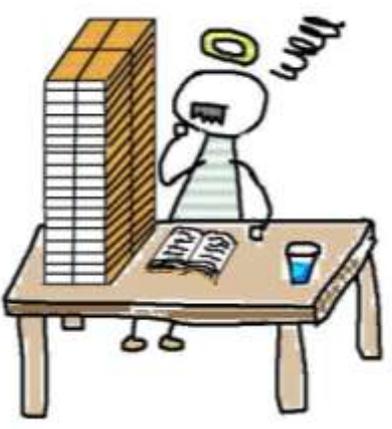
でも、相手は神様、エライ人です。

そんなエライ人を簡単にだませたものでしょうか？

しかし、これが案外うまくいきました。

「あんまりたぐやと書いてあると読むのがタイヘンだから、  
日記はみんなだけみじかしく書いて…。」

と神様が命じていたのです。



じじいして神様は、生きものひとりひとりのじじいを知りたいとせめて、日記を書かたてい  
ることをウソに書いてしまいました。

そのくせ、神様が生きものたちを滅ぼそうとするのを、

「わるい子たちだけではありません。」

「チャンスをおげいひなれ。」

と、引きよめるのだった。

なぜって、もう一度作り直すことに、なにが悪かったか調べて、ウツカリホントウの  
じじいがババしたらタイヘンですからね。

あれから千年…。

妖精達は、いつしよつげんめい生きものを『お世話』  
していましたが、それは『のりもの』として使ったため…。  
オモチャにするためでした。

そんなことも知らない神様は、

「妖精たちは働き者じゃのう…。」  
と、ほめることになりました。



でも、そんな中にも一人だけ、ナマケモノがいました。  
ハックです。

ハックは、生きものが困っていても知らなびり…。  
悲鳴をあげるまでほつておいてから、ジブジブ助けるのです。  
ハックの言いぶんは、じぶじぶだ。

「いつも助けていたら、ナマケモノになってしまう…。」  
「なんでも自分でやるクセをつけさせないといけない。」



そんなハックでしたが、意外なことに『ぬけみち』を知らませんでした。

仲間がいそがしいときにも手伝わなかったせいで、自分だけやり方を教えてもらえなかつたのです。

いちおうきえこはみましたが、頭を使うこともなまけてたせいで、分かりません。

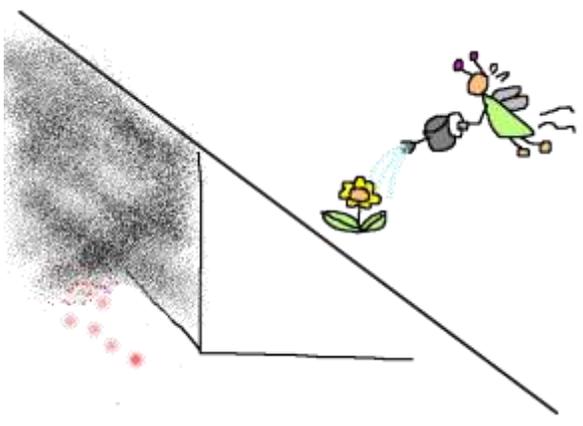
じぶじぶ「教えないと神様はびりすー!」とをわびだしたので、仲間たちはジブジブ教えることになりました。

「まずは動機をよういするんだ。」

「お酒を飲んでたとか、ショックな出来事があったとか…」  
「それらしければ、なんでもござい。」

「のってって、迷うフリをするのをわすれるな。」  
「イタズラがおわったら、良心を責めて…」

「反省したとじろを日記にっけろ。」



そのころ、子ネコのお世話せわをしていたハック…。  
飼い主の人間のおうちで、食くべては寝る生活です。

そんなある日、テーブルの上に  
おいしそうなケーキを見つけました。

お母さんが子どもに作つくったバースデイ・ケーキです、

ハックは、考えました。

『子ネコは、イタズラ好きと評判だ。

のこともバしたりしない…。』

さっそくのしつこくとしたハックですが、  
すべては動きません。

仲間がくれたアドバイスをおもいだしたのです。

頭の中

『おわっちゃダメ。』

『いじわるな、ママ。』

を何回か思いつかべてから、

『ちょっと、なめるだけ…。』

と流されたフリをしたのでした。

そうして、ゆうゆうテーブルに飛びのるじ、

じころゆくまでケーキをたんのうしたのです。

イタズラがおわって、子ネコがわねに  
かえったときには、

もう手おへむ…。

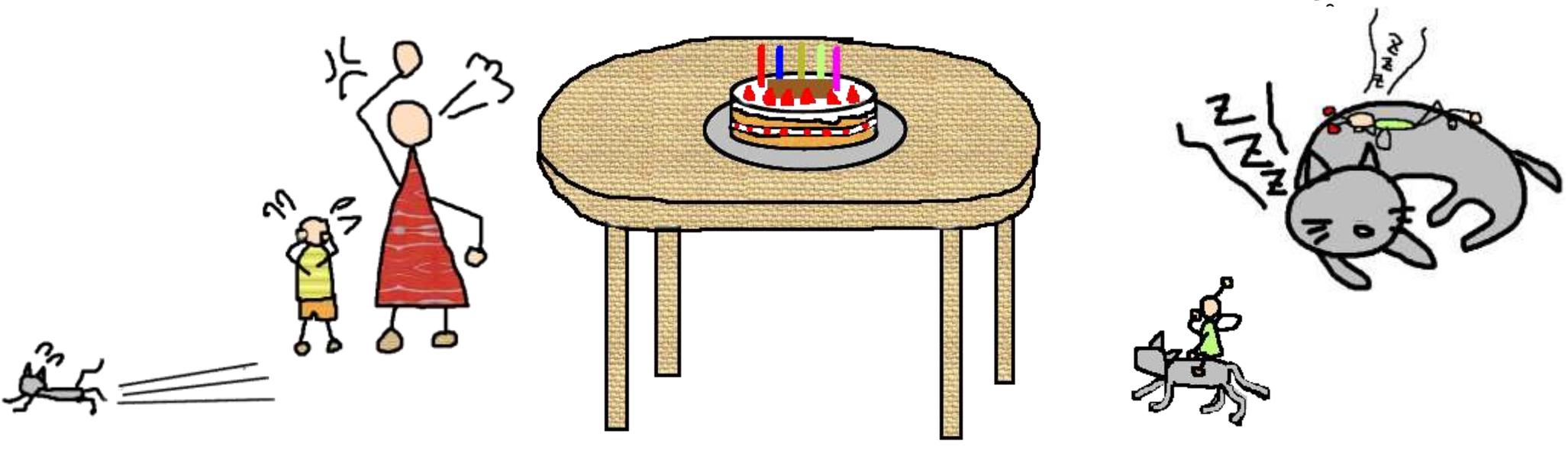
ケーキはメチャメチャ。

お母さんはカンカン。

子どもはフンフン泣いています。

かわいそうに、子ネコは

おうちを追い出されてしまいました。



子ネコはトボトボと歩きながら、

『なんで、あんなじじ、しちゃったんだろ…?』

と首をかしげました。

しかし、ハックが迷うフリをした時のこと、  
流されるフリをした時のことを思いださせるじじ、



『そうか、誘惑に負けたんだ…。』

そうかんちがいすると、またおちいんでトボトボと歩いていきました。  
じじが、『のじじの』のフシギなところ…。

のっとられているあいだは、自分と妖精まじさんのくぐつがつかないのです。  
むしろ、妖精さんが本体なので自分にはどうにも出来ないのです。  
自由のない一人羽織と言ったところでしょうか？



じゅびよく子ネコに反省をさせたハックは、

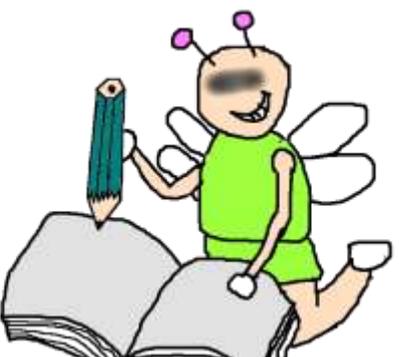
『〇月×日。』

子ネコは、誘惑に負けてケーキをだいなしにしたと  
反省しました。』

と日記につけました。

ウソではありませんよね？

でも、神様かみさまは気づきませんでしたし、  
天使てんしたちもなにも言いませんでした。



《第一章》

あーっ、ハックが人間の町を見物しているよ、  
子どもたちが「ヘンテコなおかしをおいしそうに」  
ほおばったり、ピカピカひかるオモチャで  
夢中になって遊んでいるのを見かけました。

『いいなあ…。おいしそうだなア、楽しそうだなア…。』  
と、ハックはキョウウミした。…。

しぎは人間の子どもをお世話するのじつじつしました。

お世話をするのは、生まれたばかりの男の子に、  
エリオンと言いました。

お父さんは、がんばって働いてお金持ちになった、  
とわかる。成金。とわ。

お金持ちのおうちならゼイタクができますからね。

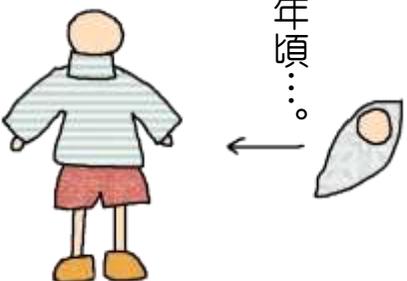
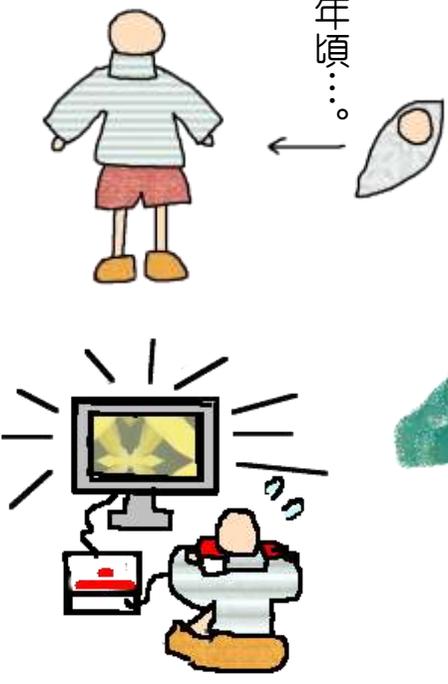
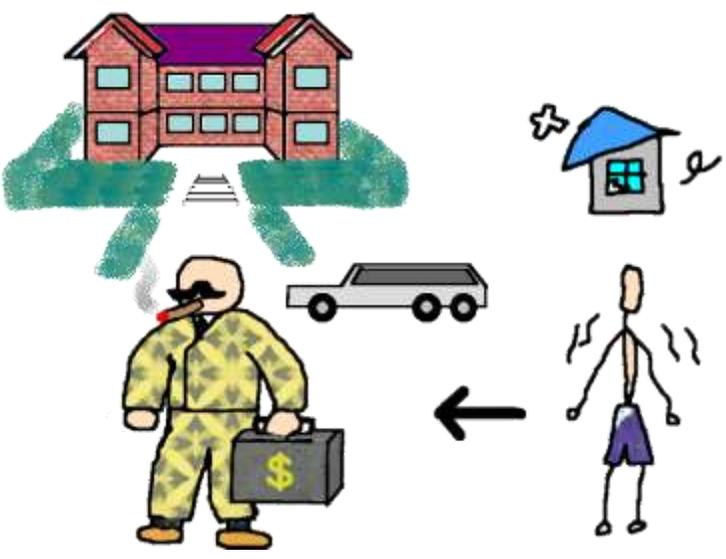
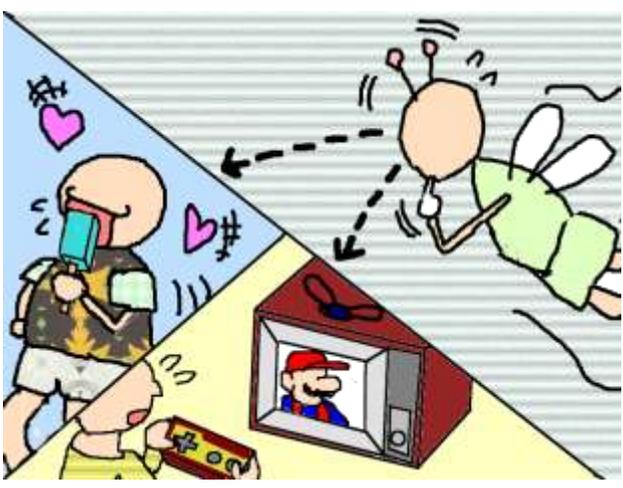
しぎが都会の名家だと仲間と奪い合っていたのですが、  
そのしぎのしぎんと手をこったのです。

もちろん、お金のないおうちとせ、  
両親をわるいおまじないで応援すれば、  
ギャンブルや、ペン師として成功させられますが、  
それはそれで面倒なのでした。

…それ、男の子はスクスク育ち、  
よつやくおかしやオモチャを楽しむお年頃…。  
でも、オモチャで遊んではかりでは、  
お友達ができません。  
お勉強だっておそろかになります。

おかしを食べすぎれば太りますし、  
冷たいジュースも飲みすぎればおなかをこわします。

ふつうは、イタイ目にあうと気をつけますが、  
お父さんやお母さんがいへら言っても、  
なおりません。



いつしか、エリオンは『遊んでばかりで、だらしのなごみ』と呼ばれるようになりました。

ここがハックのかしここところ…。

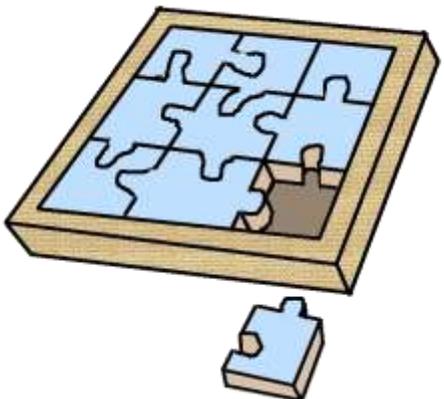
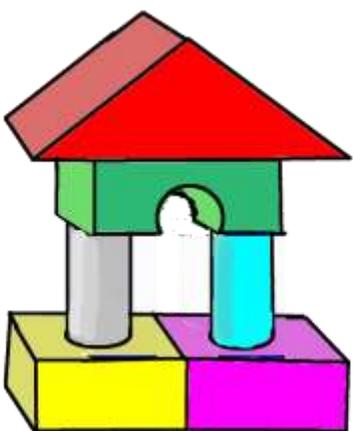
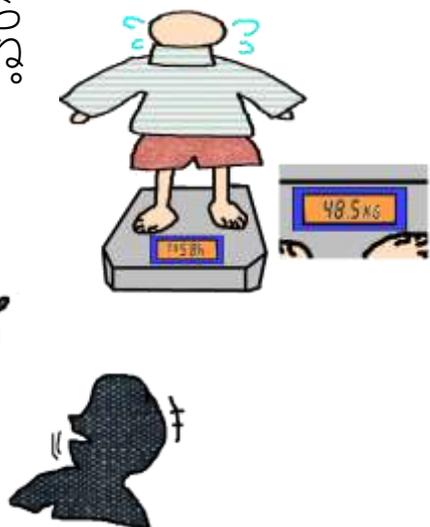
なにしろ、生きものは妖精ようせいさんのことを知りません。そういう評判があれば、乗っ取って遊びほつけても誰にも（それこそ、エリオン自身にも）気づかれませんかからね。

そんなハックがなにより困るのは、エリオンがお手伝いや

勉強の楽しさを知ってしまったこと…。

ここだけの話、お手伝いにはパズルや積み木のような楽しさが、勉強にはクイズやナゾナゾのような面白さがあるんです。

そういうことを知られてしまったら、やりたくなくなるからな。



## 《第二章》

いそがしい妖精さんにもオヤスミはありました。妖精の世界にもびるのです。

以前、『妖精さんは自分の体をもちません。』と書きましたが、それは「こちらの世界のこと」。

ホントはむしろこの世界に体があつて、タマシイだけで遊びに来ているのです。

「こだけの話、むしろの一日は、こちらの数ヶ月…。」

ゆだんしてると、あつという間に時間がすぎつてしまいます。

でもハックはウツカリねぼうしたフリをしては、おおめにオヤスミをとっていました。

なぜって、『おいらは』『ちもち』『はむか』『ごたご』や『へんご』は「いっしょ」したくありませんからね。

ハックはエリオンがしろへなる里帰り、ほむほむがめいじんになら、ちやっかり戻つてきていました。

しかし、もし妖精さんがオヤスミ中に、生きものがキケンな目にあつたらどうするのよ？

そこはさすが神様…。

そんなこともあろうかと、魔法のかんさつ日記にはユミシの機能がついています。

なんと未来のページに『予定』を書く、生きものがそのおりに動くのです。

『一日中、家にいる。』と書かれれば、その生きものはホント一日中家にいます。

ベンリですよね？？と、こんなベンリな機能を妖精たちが、ほつておくはずもないのです。

早速イタズラしようとした妖精立ちですが、問題点が二つだけありました。

「いせ、あつてなごい』を書くてもダメ、ごいごい…。」

勉強ギライな子が『トシセン勉強します』とか、オシャベリ好きの子が『ズーッとだまのつづける』とかです。

しかし、こでも妖精たちは『ぬけみち』を見つけてました。

なんと、予定を書く妖精さんが、『あつてもおかしくない…。』と思えば、ごいごい「あつて、あつて」。

わるいことに、妖精たちは自己暗示の達人…。

これまでイタズラが見つかると、自己暗示で良心をしまかしてきたので、そんなことは朝飯前でした。

ふたつめは、神様の目をどろどろさせてしまかすか？？です。

おとなしかった女の子がいきなりダイタンになる…とか、育ちの良いお嬢様が一人で貧民





『エリオンの悪いところをなおしてあげよう』、と、

『本人のためを思って、』

イジメているのだ、と思ってしまう。

もしホントに「ためを思っただとしても、他にやりようがなさうなものです。あやつられている間は他のやりかたを思いつけないのです。オマケになぜか、それが一番正しいように思えるのだから、不思議です。」

あ、よく考えたよ、って、

『愛情が足りないから、他の方法を思いつけなかったのだ…』  
と、まるで「誰かにささわれて」いるような気分になるのです。

そして、そんなわけで、エリオンはさびしくしかたありません。

なにしろ、じじいなきびでも味方になってくれるはずのお父さんたちまで敵になってしまったのですから…。

ですが、そんなとき、あるウツサを聞きました。

『お山の公園で待っているよ、天使様がやって来て遊んでくれる。』

公園はハルカ階段の上ですが、そんなじじいは気にならませぬ。

エリオンは、がんばって毎日かよいましたが、天使様はあらわれてくれませんでした。

それもそのはず…。

天使たちが遊んであげるのは、じじいたちが気に入った子どもだけ…。  
気に入った相手なら、それこそ **周囲の人間を追い払ってでも**  
お近づきになるのですが、エリオンのような『遊んではからの  
だらしない子』はお呼びでないのです。

『たごいこの決まりじじいは、善意から作られた。』

じじは、あるエリイ人の言葉です。

それも、天使たちが人間の子と遊ぶようになったのは、  
人見知りでオトモダチができない子を見かねた天使が  
一緒に遊んであげたのがきっかけでした。

その子は天使じいじいじい遊ぶうちに自信がいろいろ、



他の子とも遊べるようになったのです。

そして、それを知った神様が喜んで、

『これからも、オトモダチのいない子がいたら、  
いっしょに遊んであげなさい。』

と、天使たち全員に命じたのでした。



よかれと思つてのことですが、実際にやるのは結構タイヘンです。

『他人との距離感を縮めさせる』『自分から声をかける勇気を持たせる』『相手やその状態によって誘い方を工夫させる』など、一つ一つ丁寧に教えないといけません。

生存本能から来る恐怖もあるので時にはスバルタが必要ですが、突き放すのではなく、よりそうことが肝心なのでした。

家族や恋人ならともかく、だれかれ構わず親身によりそうなんて、なかなか出来ることではありません。オマケに、知らない人との お付き合いは、生存本能もあって、大の大人でも怖いものです。

さて、なかなか、あきらめようとしないうエリオンに、天使たちはイラだっていました。なぜって、このままでは、言いつけをまもってないことが神様にばれてしまいます。

天使たちは神様に「しかられられたくない一心で、形だけ遊んであげることになりました。遊びの内容は、『なぞなぞ』や『かくれんぼ』です。それこそ、大人の学者さんでもむずかしいナゾナゾや、魔法でトウメイになってのかくれんぼ…。

つまり、なにをして遊ぶかは、天使たちの自由なのでした。

イジメている所を見つかったいじめっ子が『遊んであげていただけ…。』とイイワケしますが、あんな感じですよ。

…そうそう。物語の中で 人質をとった魔王が主人公に対し、『ゲームをしよう。』とか、『一つ、賭けをしないか?』なんて持ちかけますが、アしは後でイイワケするための前置き、アリバイなんです。みなさん、そんなふうには持ちかけられても、けっして調子を合わせてはいけませんよ?

ともあれ、そんなわけで、最初は がんばって通っていたエリオンも、

『ボクは、天使様にもきらわれているんだ…。』

と、なんとなくさっして、公園に通うのをやめてしまいました。

でも、やっぱり、そびっしりものはそびっしりのわが。

『こんな自分でも、神様なら、きっと相手にしてくれる。』  
エリオンは、そう考えて、教会をたずねることにしました。

天使たちは、おおあわて…。

このままでは、いいつけを守っていないことが、ばれてしまいます。  
いそいで大雨をふらせてカミナリをならすと、エリオンが教会をたずねるのをジヤマとして  
しまいました。

そうして、夜にエリオンの夢の中へ神様のフリをしてあらわれるじ、

『お前のような悪い子は、来てはならんー！』

と伝えたのです。

では、よい子になったら会ってもらえるのでしょつか？

もちろん、ちがいます。

天使たちは、ふたたびエリオンの夢にあらわれるじ、

『テストに合格すれば、会ってあげようじ。』

と伝えました。

ちがいな生きものを自分より大切に出来るか？とじつにテストです。

もちろん、イカサマです。

じつは天使たちは 妖精たちのイタズラなんて、とじつにお見通し。

妖精たちがクビになると自分たちの仕事かぶるのでだまっていたのです。

なにをかくそう、妖精たちのイタズラのおてほんは、天使たちでした。

天使たちは早くから、生きものをオモチャにしていたのです。

チガイがあるとすれば、妖精がイタズラ目的なのじたいじ、

天使は『恋愛』が目的でした。

と言っても、それはあまたらオシマイの『恋愛』じいじ…。

恋のトラブルかぶえたら、それは天使たちのせいかもしれませぬね。

天使たちはエリオンに

『□□がみじくいから、相手じつてもならぬなじ』

ことを認めさせようよ、と、さっさと戻ってきたのよ、ハックにも手伝わせるにやうじゃなかった。

天使たちはハックをよびだすと、

『いいかい、ハック？ これから私たちはあの子をテストするけれど、ぜったいに手助けしちゃあいけないよ？』

ウツカリ合格なんてしたら、自分の悪いところを気づけなくなる。

これはあの子のためなんだ…。』  
と伝えました。

「じゃあ、じゃあおついでに『イカサマを手伝え』と言ったのよ。」

前にもお話したように、この話を聞いてくるのはお世話に必要なものだけ…。でも、そのイカサマがエリオンのためになるよ、としたら、うん、じゃあハックにとっては、ねがったりかなったり…。

「こんな、いいお話を、うん、うん、うん、ありますよ。」

まんまとハックをだきこんだ天使たちでしたが、

神様にもしもホントウのことがばれたら、どうするつもりだったのよ、と、なんと、そのときは自分たちもだまされたことにするつもりでした。

でも、それだとハックが本当のことをばらしてしまえばオシマイですよ、ね？

じつは天使たちは、

『神様があんなやつの言うことを信じるものか…。』

と、ハックをみくだしていたのです。

それだけ、自分たちは神様に信頼されている、と、うぬぼれてもいたのです。

とはいえ、そんなわけですから、エリオンが何回テストを受けても、合格できなくてあります。せん。

エリオンは、ついでに

『ボクみたいな悪い子は、神様にも相手にしてもらえないんだ…。』

と、教会をたずねようとしなくなりました。



## 《第6章》

ハックは神様<sup>かみさま</sup>にほめられて得意顔でしたが、そうは問屋がおろしません。最近、エリオンが『のっとり』について気づき始めていたのです。あわてたハックは、いそいでお父さんやお母さんをあやつると、『自分でやったことを、人のせいにするんじゃないやありません!』『自分のココロがみにくいことをみとめなさい!』とサンザンにしからせました。

そうしてエリオンに

「だれでも、悪いところをもっていい。」

「それをみとめてこそ、リップになれる。」

とねむやごんサンザンとせむじと、その言葉を口説<sup>くは</sup>つけたのでした。

エリオンはそれ以来、(ときおりシャクゼンとしないものの、)『ボクは、しょうねのいやしいサイターの人間だ…。』  
と思いつながら、ウジウジとずいづいしていました。

しかし、そんなある日、エリオンは、ふとしたはずみでホントウのことに気づくと、大声で泣きだしました。

だれも相手にしてくれないけれど、神様<sup>かみさま</sup>だけは…  
思っていたのが、やっぱりウソだったからです。



するよ、どっぴでしよう。

その声が神様に届いたではありませんか。

神様は今さらながら（ホントに今さらですが…、）  
本当のことを知ってカンカンです。

天使たちは自分たちにまで火の粉が飛ばないように、  
あわててハック一人のせいによつとしましたが、  
ハックも自分だけがいられてはたまりません。

なんとか罰を減らしてもらおうと

天使たちのしてきたことをバラしてしまいました。

もとはといえば、ハックがナマケモノなのは、

天使たちが自分たちのぶんのおこぼれを  
妖精におしつけてきたからです。

なにしろ、最近の天使ときたら、お気にいりの  
生きものと遊ぶことだけが『おこぼれ』です。

ウツカリ「お世話するのも楽しいなよ」「なんて  
言った日にはタイヘン…。」

天使達のぶんまでおこぼれを押しつけられて  
しまうのです。

実際、今日となつては、お世話の『かけもち』を  
している妖精さんはめずらしくありません。

ハックはそれがイヤで、たった一匹のお世話でもシブシブやってみせ、

『ロイツにまかせてたら、わざと失敗をしかねない。』

『そうしたら、自分が神様にしかられる。』

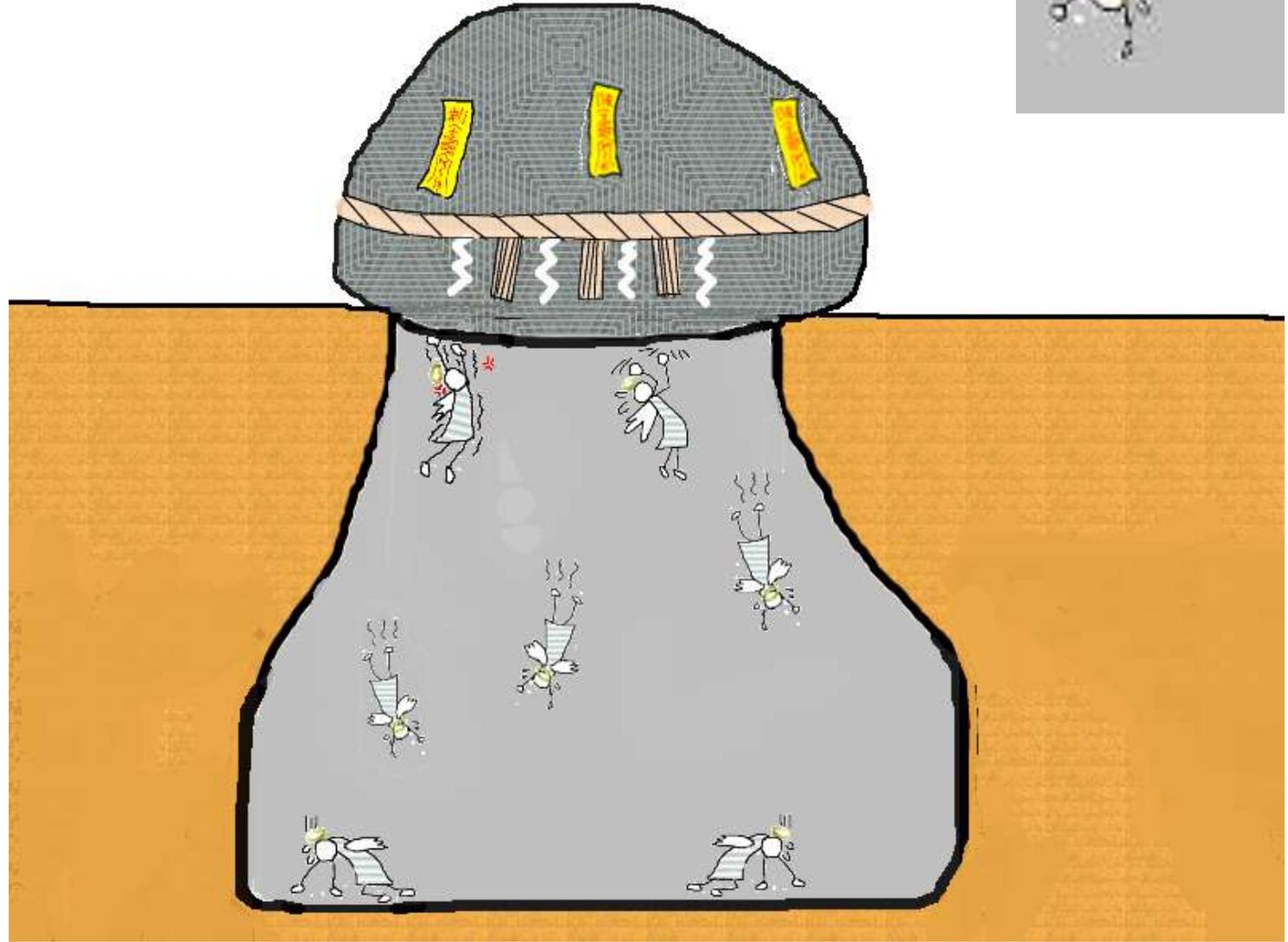
そう思わせるよつとで、『かけもち』をまぬがれてきたのです。

…と、そこへハックの話を聞きつけた妖精たちがやってきました。

ハックへの罰をへらしてもらおうと、長老たちを先頭に  
チンジ「フ」きたのです。







「さうして、いまだに世話をまかせないでいたんだ。じゃあ区長さん、今度は自分がお世話をするようになったのよ。」



《エピソード》

あれから、しばらく…。

ここはエリオンのおうちです。

たくさんあったオモチャも、今ではほとんどモノオキの中…。

おおすぎた体重もフツウにもどっています。

もちろん、遊んだりオヤツを食べたりしないわけではないわけではありませんが、

お勉強もお手伝いも、みんなと楽しみながらするようになったのでした。

めでたし、めでたし…。

《おまけ》

ある夜、エリオンは夢を見ました。  
大きな神様が小さい神様をしかる夢です。

「サボるどころか、遊びほうけた上に悪事を見逃すとは、けしからん！」

「と、とんでもない！ 私はだまされたのです！」

「天使達が白状したぞ！ 手の込んだことをさせおって！」



大きな神様は小さい神様をつかむや、

「これからは、お前が自分でお世話するのだ！」

と命じると、地上へ放り投げたのでした。

「ゆるされるまでも一度戻ってきなくてはならん！」

そこで目覚めると、手元に小さなお人形がありました。

どひどひわけか、夢を見た小さな  
神様にさっへりです。

時計を見ると、まだ夜明け前…。

エリオンは人形を抱きしめると、

もう一度、眠りについたのでした。

これでホントウトオシマイ…

